

環海異聞

五

續

内閣文庫			
番號	和	35195	
冊數	16 (6)		
函號	185	107	

共十六



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

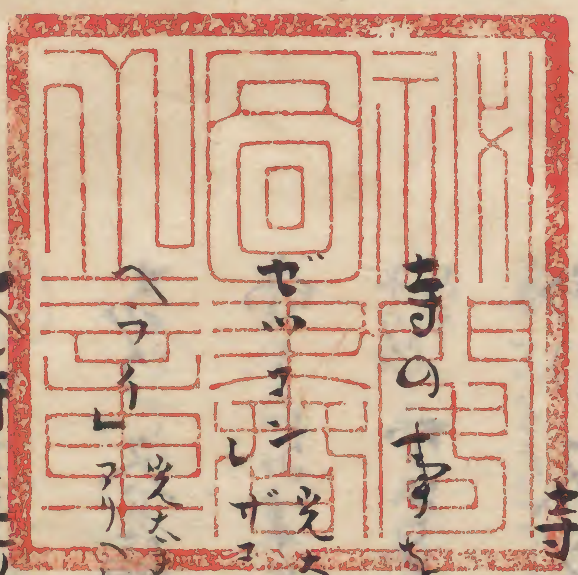


© Kodak, 2007 TM: Kodak



南見 修前集序

編脩也志
環海異聞卷之五
備用典籍



寺觀道教第四 寺并宗

寺の事と 光太史記 といふ宗旨乃事也

でつ 光太史記 と云ふ所は 光太史記 於こり寺あり古の可なり

へつ 光太史記 として大如尚をいふは 光太史記 位持す

大寺をいふ寺ありソボリといふは堂の事 光太史記 彼

カセシといふ 光太史記 規より 光太史記 於九ありといふ 光太史記 彼六尺イ

我 邪毒今の尺

トシハイウサ
の敷板名あり

男あはは佛林の又を終りの名取は余

人々の名 人ハハ名イワシニウラハ皆佛の名

とある一

お流の語は昔死去りて後そ死より芒光

の愛しうる人様お人あり壬申九人のあて

物れさ佛あり今もまきくお寺の銘は

匾額は魚至よのハそや手法佛を「スウイト

「チヨロウエ井カト」先曰「スウイト」ハ 花人より

ツウエトラカ 如くは
花名柄枯 花名柄枯
花吸ト 花吸ト

恵回中一宗ありて不派あり但寺は又文あり

ましあり所預り此檀下あり

所の名しそ檀耶寺の名を称してある

所ハ名ハあたぬよんせ

恵至中人生れ出ても又をつくを始めりて又

婦の縁起を落祭の事悉く寺の裁判を任

すゝなるわがまといふるまき者も平人と云ふ
あまなり他へ髪をいひのすゑをアツクうらま
れ外ハ書帯肉食たり

内食といハ牛羊豚等の肉を魚も肉を

と用ふハ此方よりハ桂進りたり

アリテイハ獣魚鳥の肉を食す唯麦係
野菜のこたり他ハ牛乳ハ食ふたり

オロコイアハ牛乳ハ男女老幼の皆より用

ト世育するハ法僧も用ひたり

ハハ育子ハ法僧なり

法僧ハ智多なり皆ホキテ格不知識
の人王命を授てアリテハある人お
き書帯あきハ必き定むとて法く日ハ
ありたり大わがまより人物を味くして
こもハ牛乳ハ又此の寺よりハ進りたる
衣被ハ四ハと云ハ同神して常人ハ皆

鐘樓圖



なる家小鐘樓始りも鐘の終りもあつたあす
 たり毎朝人々け鐘の音なりきりておつたあす
 しくい鐘の音をききぬや毎のこゝろ急慢
 しくあ

鐘の音はあつたあす
 鐘の音はあつたあす
 鐘の音はあつたあす
 鐘の音はあつたあす

鐘樓の内より
 振の鐘と手は
 玉柏子より好
 るるす圖



一 俗者より起り佛外をぬじよハ右手の太指合指

中指の三つれ先きを物をつまむりめく合せしは

額より起り次は腹より起りまじりたる音より起る

ありけははる自おんから十字字形をあらはしあまは

北より起り手合せしぬむと用ゐるるや

漢經の文ハ何とよふ一向をれきるるたれき

也方よりナムアミタブくときし留るるぬり彼業

音の人くぬすゴスポロニボニナヨといふを

大寺 表面 圖



寺院之圖

寺院の造築は悉く石屋敷其經營口は四角の模
 松原岩宮布設もるふ前後修りして少なきはし
 家藏如南銅版画は歐邏巴地方の寺塔を以て
 其構ひはしるを以て示すは大凡け其の如く是と
 以てしるは法家の可きと云ふ異なり其を以てしる
 其の如くはオロミニアの寺院を以てしるは其の
 如くはしるは法家に造るの如く是と云ふ

同堂
内圖

大
赤
面



一 毎月一七日ついで日のあせつてありふらぬ
又さ始よかするこころ七りの神めなる日さる前
より身を清めぬす精をす
これ月二日あえりふさあする日四脚乃肉を
禁しと集きの肉は菜は茹るま焼えりさふ
ふさあするこころ七日の神日此名をオレキリセニヤと
し 末は洋なり

一 死去あつて一七日の間たと結しき家まは
寺より コツク 離僧よりふるまき者さ其まよまぬま
後行をさるこころし

一 正月としふに月をイヌツリとらふこえりと
しふに日さあし夜候あつたニツリとせしはナ
九りのるらま可貴結と下精進潔斎をす
たうに十九日あける初の日より七りのるら
ふ中火あ終はる 二月中旬 あつたをトレスト
しふに男か遊いふむて何むさるすはな

の人くハお尋深印と云ひしすくえねハ印の
殻スホウまゝ籾スホウまゝ考つけて色を分ける物あり
彼方をり印を焼りケレストスオスケレストと
いひは方どハイステロオスケレストと考て
又印をつゝと一頁ハ口を合をけるは考て
是よりするも考て考て考て考て考て考て
同宗者ハ外の者ハ決て考て考て考て考て
考て考て考て考て考て考て考て考て考て

佛祖の事話ヨミガ籾リまさせる目と云ふ事考て考て
考て考て考て考て考て考て考て考て考て
考て考て考て考て考て考て考て考て考て
考て考て考て考て考て考て考て考て考て
考て考て考て考て考て考て考て考て考て
考て考て考て考て考て考て考て考て考て
考て考て考て考て考て考て考て考て考て
考て考て考て考て考て考て考て考て考て
考て考て考て考て考て考て考て考て考て
考て考て考て考て考て考て考て考て考て

飛人かきしき免りて牢をおすはけ希飛合
人々の口しとを束をはめて人々の口をあす人
らよ群りて見あり又王束を棄りて自ら束
しむもそのり裁き一價を罪人等よりし
ふれまき丸は捲一のよと人々の裁きの一
もしある裁きありま轉りたる車はカス大勢
入りてあつたれをばたすは人の口をたして
翻ヒツカヘ轉せざるは急れおたり

は飛の口大和者にあつて死藤なる世衣束をこもり
國より恩賜の冠帽を戴きぬけをたすは
其は後極るはくは世衣束のつちをこれ法武
もあるるははる幸のふれをふ人の口をたす
をたすけるはおろけすれは鐘をたすはあまに
本堂へお列しはぬり出はは飛人極るは回
しは土人の話の初四十九日の日ハ御祖死
まひし間を十日めは孫生しはをたすは

アリヘレイ大和為 帝より賜る冠帽圖
 上段ハ金の十字形 帽の上段ハ金銀珠玉
 を鍍む



轉車の斗人をもよせて 旋轉する 戲の圖

對向の肩を設けて 扇を作ると 再び扇を
 開くと 扇の形をばしつと
 一よりつて花の圖也

一時鐘をあしす寺敷々寺ありるを夜ハに
 なる時のしをテヤースよふ時よ教古のゆり
 けよ七のみの時よハのむむ時よ九のハのけよナハ
 せけよナハ九の時日中よ十二あしすくまじくハ
 九の時けよ教ハのハの時ハの時ハの時七の時ハ
 七の時ハの時よ教ハのあしすくまじくあねる教中ハ
 きの通の暮すハの七のあまハの時と三夜^{ヨナカ}アハ
 ニあしすより九の時ハのハの時ハの時ハの時ハの時



五ツ板のりよあしり夜の終りよ曉ちつとめて
却合敷ナに時あしす也

け鐘堂のと層よ大付斗ありいぬよ合と

し時鐘とあしすよまきり

目時計ハ奉行のぬよ一と新あり又市申
ヒトケイ

高店ハ田よまきテふあり人ハ時鐘とと

よ合まきよ毎時少ハも慶しあしす

曉卯刻

六ッ
ロストイ

六ッ半

七ッ
セツモイ

五ッ辰

八ッ
オシモイ

五ッ半

九ッ
ゼソトイ

四ッ己

十ッ
セシヤトイ

三ッ半

十一
オジコナツサイ

九ッ子

十二
ジエアナツサイ

九ッ半

一ッ
ベルオロチヤリス

八ッ未

二ッ
ドワチヤリス

八ッ半

三ッ
ニノレチヤリス

七ッ申

四ッ
チヤテレテヤリス

七ッ半

五ッ
ビヤーチ
チヤリス

暮六ッ酉

六ッ
セストイチヤリス

「チヤリス」ハ時とていふ

一より十二迄の救護時のよりを呼ぶる不右
のありし一救護の所を部々載す

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

産育及赤子命名第五

産婦育子並に赤子命名の事

凡て婦人産後三日は赤子後仰りたり其出まると
抱きて一七日の間は朝夕赤子入湯を浴湯を
わすれざるは毎朝赤子入湯を

抱きけ一赤子赤子候あるは赤子入湯を
詰問し赤子赤子候あるは赤子入湯を
赤子赤子候あるは赤子入湯を

産婦も亦さしき一はせぬるもまた
 みやとらふ後光をまじふふしむを同よ
 くれま不審く昔彼回滞るの日をれを
 見せせも彼北の風呂るハちるををれ
 此より一ふよ建川下流の家ハ産後一七の
 内ハ彼風呂るハ不飛するよのちりあひ
 是をこつて風呂入るなりと回じいふると
 人の固まりモト産家なるはもまゝいふら
ウブヤ

一産前後取扱いぬ見一事なりと産の人の
 いろくもあはれふやきす一平通河トコロコ
 のあよちまや一内容の書出を産りしをころし
 土地は根葉ともいふた考りり産れ催しりて
トリアダバ
 こゝろを呼びよせりけ葉まうて産らるモイラ
 ころふものを産る娘よちり
モイラハ波打とよしあか
 牛膝子いり産を合せて葉の
 緋のちく板いりおちりけふはあまのいふは産め
 産のちく板いりおちりけふはあまのいふは産め

乳山を嘔せふハ牛角の心チをくりて筒ツツを
先サキのふよハ屠牛ハ乳頭コロヒタルウシを取チりてそのま
まげんこれコレを小児の口へ含ませる角木ツノキの不
れ廣き口より牛乳を注ぎ入る小児ハそまげ
る牛乳匹を口につけ吸ふ生牛ウシよりれまほり
うしてそままは吸せ冷入るものハあつめて吸せ
ゆまより児の啼泣ましく牛乳ウシノチもあたまさる
時なるとかれ乳をこつれも乳逆ウシノチ出さる極キマま

よて小児をやぬり居るといふ

拙ウツクよけ育子乳哺ウシノチの法を疑をく凡婦人
子を生じて乳けあるハ身ミのそ理高敷
よつとて同くくして皆造化ウツクの所為なり
り偶ウツク々乳け出さる婦人ハ牛乳ウシノチふては
よてもそ乳を乳育ウツクくくオロコイアハ婦
人あがてそ乳け乳を乳育ウツクくくは
何ナニあるあまや乳深ウツクきよま再向ウツクきる母風

土の更なる不ちよりの事ありやとありふ

とて此の事をも記す事とありてしるは 浅受

殿舎をたふして丙寅三月庚寅の如葉

人子討伐の節はるを受向せしは女子自

然る乳を鼻より乳を育するはよき事あり

此為す不婦人にして子を養て乳けあり

此理ありんやそ婦人として ヲマ 高きことあり

あるをいしは乳母を改て養育するること

あるなりと大いに同く アウロツパン 政邏巴湖あり

止白里の事ありて シロ ありてあり

止白里ハ西細五洲ありて イルカーツカ の 或曰

男女政邏巴湖ありて オロニア 種の人をいふ オラハレ

右の事や血あり チレ 乳いづくの度 ド を失ひく

彼婦人の皆乳け出さるは チレ ありてあり

前より疑いあり チレ 後より チレ ありてあり

此事なり チレ ありてあり

あはれあがる母親となりて人向きあ像を用
きしりけり布巾をさしむる親より信
るおひしりて^{ウツキ}着衣あしむらおひしりおむこ
受をまたとちりたる人あきて抱へお尚そ自れ
縁忌あしりたる佛の^ガ一箇^ツ歌を勢ひあり其佛
像のよれふし小児れ口を付さるるなりおまはる
すこて後ひねりて信りたるをしすとふおまはる
を縁けしりあを小児のきりよおらるるなりね

き例ありとてけ式に今まきもゆるぬく身を淨
めしえお尚中立て佛のきりよあしりて身を淨
りしきあつし入ししりおゆるかき
そ日おひる佛ニコライありしそを名にまき
そ下^タおは父ある人の名に佛名を用いし下^タお
イチとつあを流るる姓はそ下^タお福してし
せし愛るるあしりて又ハイト口おひたる
布^フを授けりしニコライを名にまきしニコライ

ま下ぬれ垂るありおに陽は匂をつけなく此
内へお水を入れてとけしきく金たより

お水をとくもまたお水とてぐらうとまおつこ
春の内へ入る内へは柔くあつたをまきこ内へ
預れおこくあつた所へお水とてあつたを
おくちれおつこお水とてあつたを
つこあつたお水とてあつたを
お水とてあつたお水とてあつたを

お水の平りなりまお水とてあつたを
お水とてあつたお水とてあつたを
お水とてあつたお水とてあつたを
お水とてあつたお水とてあつたを
お水とてあつたお水とてあつたを
お水とてあつたお水とてあつたを
お水とてあつたお水とてあつたを
お水とてあつたお水とてあつたを
お水とてあつたお水とてあつたを
お水とてあつたお水とてあつたを

塔婦^{ヨメ}の衣をよきものにしてふは増儀の衣後
とりよるいな〜可人のこといほ送たの束は載
せて馬の牽つすまうた馬は遠りしゆきぬり
するまてのおきくおきいあ人たのオケソリの
めはおを冠らむわ尚塔は命い你何来々女
子を妻かき束る約定あるよりお遠あまると
同く胃作のま〜とふ又あまのまふ汝誰系を
まよまむ〜とけり遠愛なまふと〜と〜と女

余れおくとそふけ時わ尚留〜と〜と目
孫息はつらたる佛像の一面^ガ鏡を携ひ来り
る人、十あまぬり〜と佛れものふ〜塔
の口をつきさせよ海て又婦はも〜と〜と
わけ〜と後男の指^{ユビ}のぬと女は指環^{ユビワ}と〜と
〜とあ〜と〜と

男女生在の^{カスリユビ}指は指環を穿つ
波地方れ風俗ありま人ハ金環を名を

鏡のふらふら結人をさし諭末河節なす

てはなほふも前ふらふらふらふら

お婦たふと作命て指おそ塔を掌シヤクゴのとしカ

のふ掌テノヒラをのせ又ついであふむくれの婦又その

掌へ自分ハ掌をのせつらりあして後塔ハ婦此

たのふを祀りお荷ハ塔のふをさう便文を錦り

てあふふをたうとらふ二海巡ハ海へ及ハ酒を

注ツき胃飲さして女はあす女たれたのこて胃丹

きして納むさぬよう又先のめくたうとら二海

一も海りて冠りあを脱き何もしほねら

塔ハ若も到るなりうも和尚中立てて夫婦の

縁組を傳よおまふらうとんげ回可と下九ノ掌

式なりあるねハ縁組増添するふあすあ

けのふふにうおまを敵縁する事あれハ男ハ

生涯女を持ふあす女ハ男を始ハ離れ

も一生あまは思ふらうひをすうたう但男あ

額を勢ひあるまゝおちのまゝ懸上り麦^レ帳^レグ
一塊を^ス居しも條の上れたちと中央の^レ地を
堆くも^レとくく沈人^レ歌を^ス支も^レ持けし
盤^レれ^レ前^レま^レさ^レッ^レ婦も^スあ^レま^レあ^レ沈人^レを^ス歌を
持て^レ婦の^レ面^レ部^レけ^レあ^レし^レ十^レあ^レま^レあ^レり
とを^レ婦^レハ^レ手^レ沈人^レの^レ踏^レ搦^レし^レる^レま^レま^レの^レま^レ
額^レを^スあ^レし^レ一^レ條^レを^ス事^レ終^レりて^レ匾^レ額^レを^ス支^レ
ま^レ家の^レま^レ處^レま^レけ^レま^レ之^レ海^レて^レ後^レ懸^レとの

麦^レ帳^レを^ス徹^レき^レま^レ佛^レ像^レハ^レ佛^レ物^レの^レ
ま^レ下^レあ^レれ^レ條^レハ^レ斯^レハ^レ直^レり^レ何^レも^レま^レあ^レり
ま^レり^レは^レま^レま^レ一^レま^レけ^レ例^レ式^レハ^レ派^レ女^レ佛^レま^レ事^レ
右^レあ^レる^レ時^レま^レ水^レス^レ一^レチ^レイ^レテ^レし^レま^レあ^レま^レを^スて^レ説
ま^レの^レ席^レま^レし^レま^レま^レ終^レを^スい^レい^レ何^レ佛^レも^レ相^レま^レい
縁^レ組^レあ^レり^レ既^レま^レま^レ席^レの^レ佛^レハ^レ額^レハ^レ自家
ま^レあ^レり^レ何^レも^レま^レま^レ一^レま^レれ^レ契^レ約^レの^レま^レま^レ寺^レハ^レ
い^レま^レま^レ婚^レれ^レの^レ席^レま^レも^レ列^レあ^レり^レま^レ合^レ終

人をもあらししと云物く為たりと云 新飛
後書ハゴロジニテ 町奉行 小内縁ありて
け終人よ立 新飛 宅ノありけ 新飛
たをしと也

お各々申す能く支つ 盤と云 持出さるるの言
物をスーテイラレ 役人 危丁 あつたし を下し
切ふちて 塔よおむ 塔よを 法客に 新飛
あつ 四ノ名をけ 死り 支より 塔よ新飛の 新飛

あつ 盃ノ自ら 派をふけ 飲むの 法客に 新飛
たまふ 法客に 終り 支つ のむ たり 各はく
領人より 派よ おも 盤と云 あり 各はく
の 前ハ 金銀銅乃 貨錢を 持おし 通し
或ハ 金或ハ 銀銅 とも おも あり あり あり
分限よ 通す あり あり け 日乃 派派よ 出せし
と云 派派 あり 派派ハ 黒物 あり 新飛 あり
たり 法客 派と云 あり あり あり あり あり あり

環海集卷之五 畢

時よりんも、往く一川の功をへてなるとは呼
い通しつゝのりとせや一事れ成然とる内身
厄害を求めてハ自中も傷きあへるん
と文右 胃もたす薬もなうかハナチあぢよ
十七ハ八もり山年れ遠く書をもの者
あまの書、ふいふかたもたすもたす

あまの書、ふいふかたもたすもたす

